

# 視線のトラウマと主体の再構築

：反復的創作実践としての「Doing Theology」を通して

東京藝術大学大学院美術研究科

博士後期課程グローバルアートプラクティス専攻

1323932 LEE JEUNNE 李知恩

## 序論

本論文は、「長い間無意識の奥底で私を支配し続けてきた他者の視線」という個人的な強迫観念から出発する。この執着は、外見至上主義（ルッキズム）、男性的眼差し（Male Gaze）、SNS文化といった現代社会の構造的問題と深く結びついており、個人の内面にトラウマとして浸透する。本稿の目的は、こうした視線の圧力を芸術実践によってどのように外在化・再構成し、傷ついた主体性を回復できるかを、筆者自身の制作と思索の過程を通じて明らかにすることにある。

## 第1章：社会の鏡と歪んだ自己：視線の内面化と「I」と「me」の葛藤

まず、クーリーの「鏡に映った自我」やミードの「I」と「me」といった自己理論を現代的文脈で再解釈し、他者の視線が自己を形成すると同時に、いかにして抑圧的な規範を内面化させるかを考察する。特にSNS時代において、このメカニズムは「アルゴリズム的パノプティコン」として機能し、絶え間ない自己演出と比較を強いる。作品『空空彫刻』の分析を通じて、内実を問われず外面の美しさのみが評価されるルッキズム社会の虚しさを風刺し、問題の根源が外部の社会的視線にあることを提示する。

## 第2章：視線との対峙：黒、物質、空間を通じた芸術的抵抗と誘惑

社会的視線の圧力に対し、芸術的戦略として「黒」という色彩のアンビバレンスな力（吸収と攻撃）と、物質性（ファブリック、焦げた質感など）の探求に焦点を当てる。フーコーの権力としての視線と、ラカンの不安を誘う「眼差し」の概念を援用し、作品がいかんにして視線の権力関係を攪乱するかを論じる。作品『MEME Dress』の分析では、美の規範を過剰に遂行した結果「モンスター」と化してしまう悲劇性を、バトラーの「遂行性」理論と結びつけ、抑圧への抵抗としての可能性を探る。

## 第3章：内面化された視線：記憶、執着、そして他者操作の欲望

視線が完全に内面化され、個人の記憶や欲望と結びつき、トラウマを再生産する力学を分析する。特に、個人的なトラウマの具体相として「隠れ受動的攻撃性ナルシスト」による心理的支配を取り上げ、それが芸術実践の根源にあることを明らかにする。作品『GENE』と『Seeping』は、こうした内面化されたトラウマに対し、記憶を統制し、主体性を取り戻そうとする「芸術的リチュアル（儀式）」の実践として分析される。

## 第4章：「Doing Theology」：反復的实践を通じたトラウマの再構築と主体性回復

本論文の核心概念である「Doing Theology」を提示する。これは、反復的な肉体労働を伴う創作行為を通じて、精神的苦痛と対峙し、自己との和解（救済）を模索する実存的な治癒のプロセスである。ルイーズ・ブルジョワ、草間彌生、エヴァ・ヘッセら先行作家との比較分析を通じて、この実践の独自性を位置づける。本章では、完全な治癒を目指すのではなく、「不完全な治癒の生産性」にこそ、芸術的創造を継続させる原動力があることを主張する。

## 結論：新しい視線の提案 - 傷ついた主体の再構築に向けて

本論文は、個人的なトラウマの探求が、社会的視線への批評と、傷ついた主体の再構築という普遍的な問いへと接続する過程を示した。反復的な制作実践「Doing Theology」は、トラウマを消し去るのではなく、その傷と共に生き、創造のエネルギーへと転換していく術を学ぶ終わりのなきプロセスである。この「視線のトラウマと主体の再構築」は、現代社会の「見る／見られる」構造を再考させ、傷ついた主体が自らを回復していくための新たな視点を提案する試みとして結論づける。